

# 姫路城城下町跡

—姫路城跡第376次発掘調査報告書—

2018

姫路市教育委員会

# 姫路城城下町跡

—姫路城跡第376次発掘調査報告書—

2018

姫路市教育委員会

## 序

我が国が誇る世界文化遺産の一つでもある姫路城は、江戸時代の初めに五重六階、地下一階の大天守が築かれ、以来、約400年にもわたって歴史を刻み続けてきました。また最近では、平成の大修理により「白鷺城」の別名に相応しい白亜の大天守が蘇って話題になったことも記憶に新しいところです。

本書は、外曲輪の北側に位置する町人地である綿町における発掘調査報告書です。当時の綿町には西国街道が通り、幕末には姫路藩御切手会所や御国産木綿会所が設置されるなど、経済の中心地の一つであったことが知られています。今回の調査では町家に関する各種の意向を確認しました。また、その下層では「播磨國府」の時代の瓦が出土するなど、当地が古くから重要な地であったことが明らかになっています。

最後になりましたが、今回の発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました事業者をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

## 例 言

- 1 本書は、姫路市綿町で実施した姫路城下町跡（県遺跡番号020169）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、姫路市綿町81番、82番、83番、84番における店舗建設工事に伴い、事業者と委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが実施した。現地での発掘調査は、姫路市埋蔵文化財センター福井 優が担当した。
- 3 発掘調査と報告書作成の費用は、事業者の負担による。
- 4 発掘調査は、平成29年5月16日から同年6月17日にかけて実施した。調査面積は247m<sup>2</sup>である。
- 5 本書の編集・執筆および遺構・遺物の写真撮影は福井が行った。
- 6 本報告にかかる調査の記録、出土遺物などは、すべて姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡 例

- 1 発掘調査で行った測量は、世界測地系（測地成果2000）に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、数値はm単位で表示している。
- 2 本書で用いる標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
- 3 本書に掲載した地形図は、姫路市基本地形図を使用した。
- 4 近世姫路城は、文化財保護法による「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地「姫路城下町跡」に区別されている。調査次数についてはこれを区別せず、「姫路城跡第〇次」としている。今回の調査のうち、確認調査は姫路城跡第372次、本発掘調査は姫路城跡第376次とする。
- 5 遺構の略称は、以下のように呼称している。SK：土坑、SD：溝、SE：井戸
- 6 遺構・土層等の呼称は、整理に際して変更したものもある。
- 7 土層等の色調は、小山正忠・竹原秀雄編2003『新版 標準土色帳 25版』日本色研事業株式会社に準拠した。

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平成29年(2017年)に姫路市綿町81番、82番、83番、84番において、店舗の建設工事(対象面積約480.96m<sup>2</sup>)が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡(県遺跡番号020169)に該当する(図1)。事業者より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたため、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。そこで、まずは事業地内の遺跡の状況を把握するために平成29年2月28日から同年3月1日にかけて確認調査を実施した(遺跡調査番号20160524)。調査の結果、設定した4箇所すべての調査区において第2次世界大戦末期の空襲による戦災焼土が残存しており、その下に礎石と思われる石材をはじめ、大型の土坑などの遺構を確認し、近世の陶磁器などの遺物が出土した。

事業地内に遺跡が存在することが判明したため、兵庫県教育委員会からの発掘調査の通知に基づき、工事の掘削により遺跡に影響が及ぶ建物基礎や地中梁などの範囲247m<sup>2</sup>を本発掘調査の対象とした。調査に際して、姫路市と事業者で委託契約を締結し、姫路市埋蔵文化財センターが現地調査や整理作業等を実施した(遺跡調査番号20170067)。

本発掘調査・整理作業の体制は以下のとおりである。

### 姫路市教育委員会事務局

教 育 長 中杉 隆夫  
教 育 次 長 名村 哲哉  
生涯学習部長 岡田 俊勝  
文化財課長 花幡 和宏  
課 長 补 佐 大谷 輝彦(調整)  
技 師 黒田 祐介(調整)

### 姫路市埋蔵文化財センター

館 長 前田 光則  
課 長 补 佐 岡崎 政俊(庶務)  
主 事 岡本 武平(庶務)  
係 長 森 恒裕(調整)  
技 術 主 任 福井 優(調査)

## 第2節 姫路城城下町における今回の調査地の位置

今回の調査地である姫路市綿町は、姫路城大天守の南南西約810m、惣社門から中堀を渡った西側に位置し、宝暦年間(1751~1753年)の「姫路城下諸町繪図集」(『姫路市史』第3巻付図)によると、山陽道の両側約284mの範囲には50軒の屋敷が統一していたという。また、今回の調査地は宝暦年間には七右衛門という人物が所有する広大な敷地(表地口十一間一尺五寸(約20.5m)、裏行き十七間六尺(約31.1m))の北東側に位置することがわかる。

綿町については、「本町・綿町・元塩町旧記丁格録」とよると「三丁町之儀は、往古より御城下町頭丁と被為成置、惣町より御訴訟は惣代として御願奉申上來候」とあり、「頭丁」の一つであったといふ。万治三年(1660年)の「綿町地子銀帳」等の史料から各町の地子銀高を比較した三浦俊明氏の研究によると、綿町の地子銀高は本町に次ぐ高さであることがわかる(三浦 1997,pp18-22)。これは各町間に町割り当初から格式があり、それによって町が序列化されていたことを示しているといふ。そして、城下各町の家数や地子銀高が記載された「姫路町本家数並順町割御礼控」の末尾にも、「右之順町割御礼格式也」と記載されている。また、調査地北側(現広島銀行敷地)に河合寸翁によって、文化三年(1806)に姫路藩御切手会所が、同四年に御国産木綿会所が設立されたことは(写真1)、綿町が当時の経済の中心地であったことを物語るものといえる。



写真1 「姫路藩御切手会所・御国産木綿会所跡」石碑

## 第3節 本発掘調査

本発掘調査の対象面積は247m<sup>2</sup>である。調査区はフーチングと地中梁の設置に伴う掘削範囲を対象としたため、図2のように梯子状を呈している。長辺をそれぞれ東区・西区、短辺を北から順に1区、2区、…6区とそれぞれ呼称する(図2)。

調査は平成29年5月16日に開始した。表土や、戦災焼土を含む近現代層については主に重機による除去を行い、遺物の採集に努めた。確認調査の成果に基づき、基本的には地山上面で遺構検出を行ったが、遺構の状況に応じて上面での精査を実施した。それ以外の部分については地山まで一部人力を伴いながら重機によって掘り下げた。地山上面では人力による精査を行い、検出した遺構の調査を進めながら、同年6月17日に現地調査を終了し、同20日に埋戻しを完了した。

現地調査終了後は、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品などの整理作業を行い、本報告書刊行をもって一連の調査を終了した。

## 第2章 調査の成果

### 第1節 基本土層

今回の調査地における基本土層は、盛土、第二次世界大戦の戦災焼土を含む近現代土層、近世土層、部分的に残存する中世旧耕土を経て、黄褐色シルトの地山に至る(図3・4)。調査区の北西部では、部分的に下位の砂礫層が高まりをみせている。西区においては近現代の擾乱を大きく受けおり、本来建物があったと思われる範囲の土層の大半は既に失われていた。

### 第2節 遺構

今回の調査で検出した江戸時代の主な遺構は、礎石30基、燃焼部7基、土坑39基、井戸3基で、奈良時代の遺構は溝2条である(図2)。ここでは、特徴的な遺構や図化可能な遺物が出土した遺構についてふれておく。なお、遺構の番号については、基本的に調査時に付したものを使用している。

#### 1 硏石

東区において、事業地北端から南に約4.5m～12mの範囲で土間の三和土を少なくとも2面確認している。その範囲内で確認した礎石21基を検出したが、いずれも建物の構造を復元できるものではなかった。使用された石材は全て河原石で、形態は様々である(図5)。大きさは、最大長20～30cm、厚さ10cm前後のものが多いが、中には20や22のように比較的大きめの石材もみられる。礎石上面のレベルについては、標高12.4～12.5mのものと、12.4m以下の大まかに2群に分かれれるが、必ずしも平面的に有機的な関連は看取できない。また、図6にあるような南北方向に一列に並ぶ石材も検出したが、その性格については不明である。

#### 2 罩

北東部で計7箇所の竈の痕跡と思われる燃焼部を確認した。建物の建替えなどにともない破壊された後に埋め戻されたり、埋戻し後に燃焼部上には礎石8が燃焼部2上が据えられている(図7-1)。燃焼部1は比較的残りがよく、焚口を東に開口し、土坑状の落ち込みが伴っている(図7-1)。焚口には豊島石が2石据えられていて、それぞれ幅約10cm、長さ約10cm・20cm、高さ約6cmを測る。燃焼部の奥行きは約1.4mである。燃焼部には炭化粒や灰が約2cmの厚さで堆積しており、その外側には両側壁を構成していたと思われる石材の抜跡があった。抜跡の間隔は約30cmである。このうち、炭灰は幅20cmの範囲でみられた。輪郭が明瞭であったことから本来はしっかりととした構造の壁が存在したと思われる。その抜跡を含む燃焼部の両端は、被熱による赤化、硬化が顕著である。燃焼部奥は約30°の傾斜で煙道を構成している。燃焼部6は奥行き約90cmと燃焼部1よりもやや小型であるが、煙道傾斜はやはり約30°を測ることから、燃焼部1と同様の構造を有していたといえる。また、今回確認した燃焼部は、燃焼部1・2、4・5、6・7のように本来は二基一対で竈を構成していたと思われる。いずれの燃焼部も独立した掘方をもっており、半地下式とでもいえよう。燃焼部を埋めた土層からは巻貝や瓦のみが出土し、時期を特定できる遺物はみられなかったが、礎石や土間を除去した後に検出できたものが多いことから、これらに先行する遺構である可能性が高い。

#### 3 土坑

土坑は調査区内で平面的な分布の偏りはなく、満遍なくみられた。規模について、先にみた土間の三和土の範囲との南側で比較すると、土間以南では、SK11・15・21・31・36のように径が1m前後の小型のものもみられた一方でSK5は4m以上、SK7・16は3m以上、SK37は3m以上と比較的大型な土坑が見られた。土間構築以前の土坑については小型のものが多いように思われる。今回検出した土坑のうち、SK15・36・37で比較的まとまって遺物が出土した。SK15は径約80cm、残存深さ約20cmであったが、土師皿(5～9)、染付杯(4)に加えて硯(10)が出土した(図10)。土師皿の年代観から江戸時代後期のものと思われる。大型の土坑であるSK36からは土師皿(11)や染付碗(12～14)、擂鉢(15)、徳利(16)、壺(17)、軒丸瓦(18)、鳥食(19)などの多くの遺物が出土した(図11)。なかには、古代の平瓦(20)もみられた。18世紀代に埋没したと考えられる。SK37からは擂鉢(21)、染付皿(22)、炮烙(23)が出土した。概ね18世紀に埋没したと思われる。

#### 4 井戸

今回検出した3基の井戸はいずれも石組みで、河原石を使用している。SE1は掘方径約1.8m、井側径約80cmで検出した高さは約12.3mである。板石によって蓋をされており、内部には金属製の管がみられた。本体工事の掘削深度との兼ね合いで完掘しなかった。また、遺物はほとんど出土しなかったために、機能していた時期は不明である。SE2は掘方径約1.9m、井側径約80cmで検出した高さは約12.3mである。井側内は大型の間知石などの石材によって埋められていた。本体工事の掘削深度との兼ね合いで完掘しなかった。遺物はほとんど出土しておらず、使用時期等は不明である。井戸3は石組みの南半が崩落していた。掘方径約1.8m、井側径は図上復元で約90cm、検出した高さは約12.1mであった。本井戸についても完掘していない。井側内は土砂で埋め戻されていた。時期のわかる遺物は出土していない。いずれのいども検出レベルは東区で検出した礎石下端のレベルに近いことや、その平面的な位置関係から、礎石が構成していた建物と同時期のものである可能性がある。

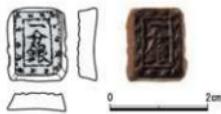
#### 5 溝

奈良時代の溝であるSD3・4はともに幅約1m、深さ約20cmで、かまぼこ状の断面を呈する。SD3・4は近世以降の削平を受けており、必ずしも連続していないが、断面形状や方向などから両者は同一の遺構である可能性が高い(図2)。出土遺物は平瓦・丸瓦のみで軒瓦はみられなかった(21-22)。いずれも8世紀代のものと思われる(図13)。

#### 第3節 遺物

今回の調査ではコンテナ(天昇電気工業製テンバコP18、約18L)に30箱分の遺物が出土した。

1は施釉陶器片口の注口である(写真図版2)。2-3は丹波焼で、2は筒型の器形を呈するが、器種は不明である。3は甕である。概ね江戸時代後期のものと思われる。4は器種不明の染付である。杯部の底に高台と思われる接合痕が残るが、脚台とするとやや違和感が残る。発色は悪い。5~9は土師皿である(写真図版2)。径は5~8が9cm台であるのに対し、9は8cm台と一回り小型である。底部にはいずれも糸切り痕がみえる。10は石製壺で、裏面に「豊島石製」との線刻が微かに見える。11は土師器皿である。12-13(写真図版2)は刷毛目の施釉陶器の碗である。14は青磁碗である。15は関西系の塗跡、16は徳利である。17は肥前系陶器の施釉壺である(写真図版2)。18は巴紋を有する軒丸瓦の瓦当、19は鳥食である。圓化していないが、3区の機械掘削中にもう一点出土している。20は奈良時代の平瓦で、側面は鈍い四角形を呈する。凹面側の両方から同程度にヘラ削りを施すことにより、鈍い三角形を呈する。凹面には布目が、凸面には繩目との印きが残る。21は丹波焼の塗鉢である(写真図版2)。22は肥前陶器の皿で、高台は甚簡底である。23は炮烙である。口縁部は丸く收まっている。圓化していないが、これとともに出土した個体には、口縁部のやや下がったところに2つの穿孔が残る。一方は外面から、もう一方は内面からで貫通していない。24~26は奈良時代の瓦である。24は平瓦で、側面は、凸凹両面からのヘラ削りがみえるが、凸面側からの削りのほうがやや強い。凹面には布目が、凸面には斜格子状の印きが残り、後者の印きには、斜格子の内部をX字状に分割している。25・26は丸瓦で、26は玉縁を有する。また、東区南壁の壁面清掃中に土製模造貨が出土した(挿図1)。一分銀を模したもので、表面にのみ型押しをし、銀彩がわずかに残る。



挿図1 土製模造貨

#### 第3節 まとめ

今回の調査地は、初めにふれたように近世城下町においても比較的ランクの高い屋敷地にあたる。そして、礎石や土間の三和土などの建物、井戸、廐棄土坑と思われる大型の土坑という、これまでの姫路城城下町跡における調査成果で明らかになっている町家の屋敷の基本的な構造を追認することができた。しかし、建物については、礎石や土間など部分的な把握にとどまり、具体的な建物構造について具体的に復元するには至らなかった。しかし、竈を構成する燃焼部を数基確認するなど、今後、当該地域における町家建物の内部構造を復元するうえで、重要な成果を得ることができた。竈については構造こそ異なるが、江戸時代前半(17世紀代)のものを同じ緑町内で確認している(中川編2017)。また、SD3・4やSK36では布目瓦が出土していることから、調査地、もしくは付近に奈良時代の瓦葺建物が存在していたことが窺える。近年では、平野町で実施した姫路城跡338次調査(黒田編2017)のように、從来把握されてきた本町遺跡よりも広範囲に古代の瓦葺建物が存在していたという調査成果が得られており、今回の調査成果もそれを補強するものである。

【引用・参考文献】三浦俊明1997『諸代藩城下姫路の城下町』(清文堂、姫路市史編集専門委員会編1991『姫路市史』第三巻 本編 近世1 姫路市立黒田祐介編2017『姫路城城下町跡-姫路城跡第338次発掘調査報告』姫路市理藏文化財センター調査報告第43集 姫路市教育委員会、中川猛編2017『姫路城城下町跡-姫路城跡第343次発掘調査報告書』姫路市理藏文化財センター調査報告第44集 姫路市教育委員会

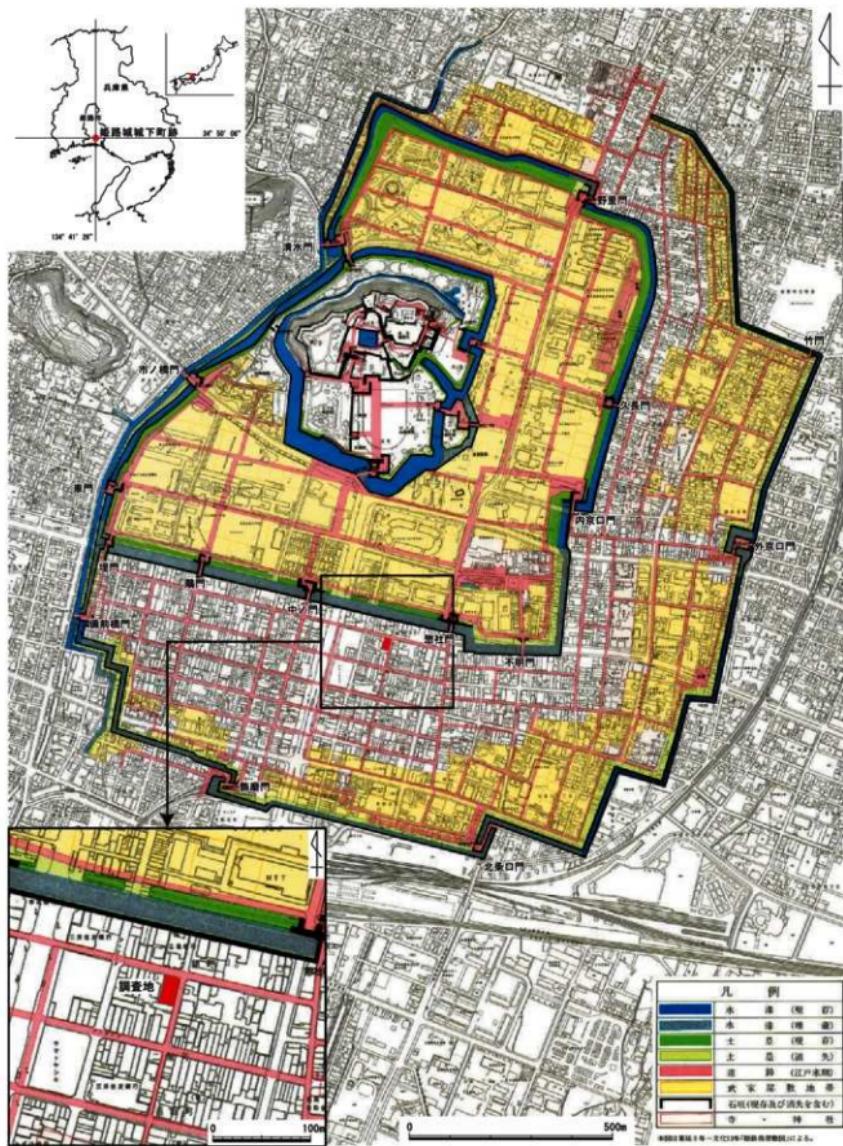


図1 調査位置図 (S=1 : 12,000・S=1 : 5,000)



図2 調査区全体図 (S=1:150)

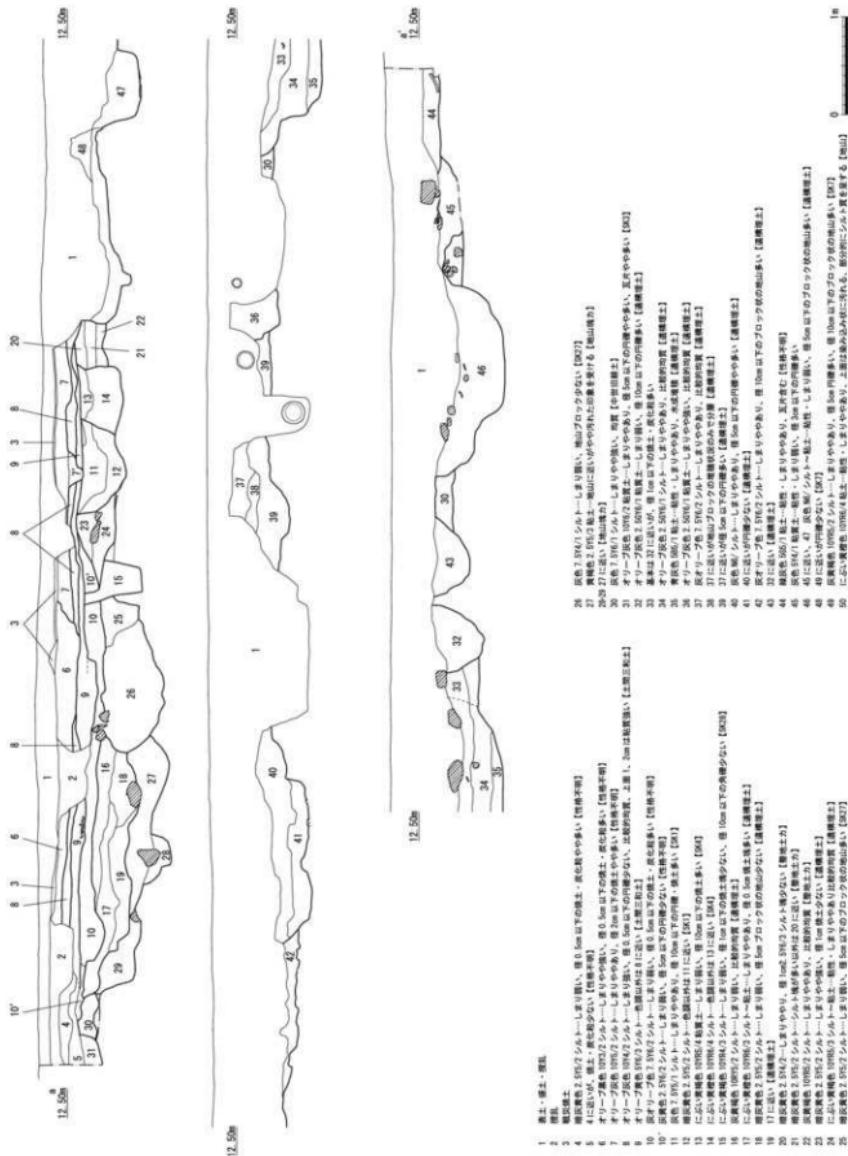


図3 東区東壁土層断面図 (S=1:50)

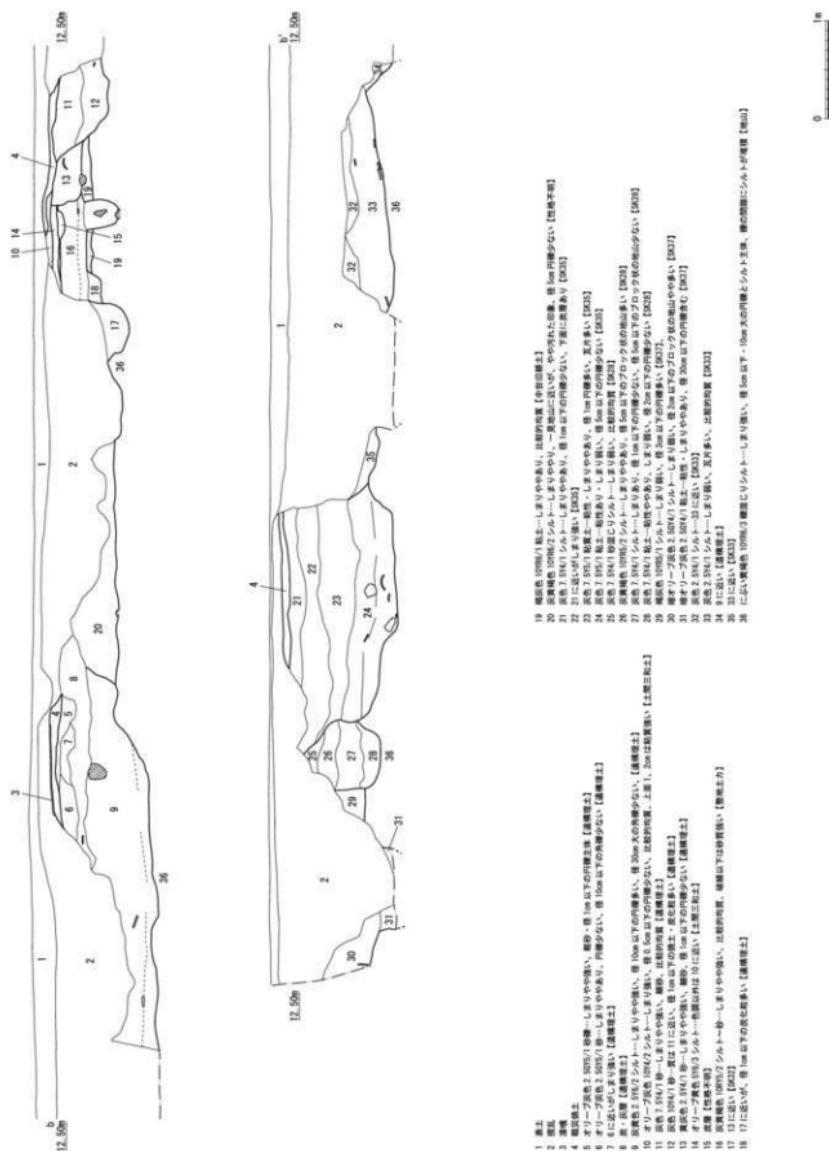


図4 西区西壁土層断面図 (S=1:50)

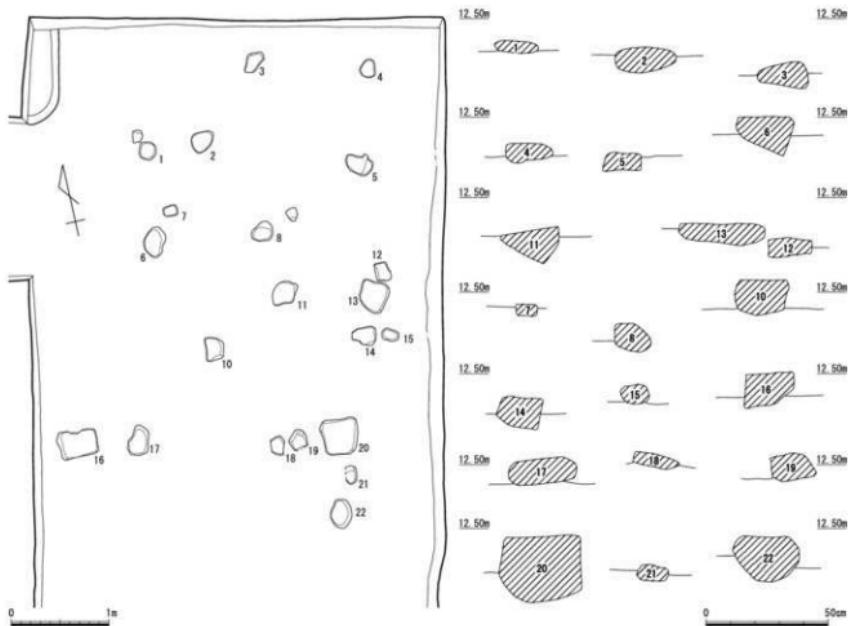


図5 東区北半壁石平・断面図 (S=1:50, S=1:20)

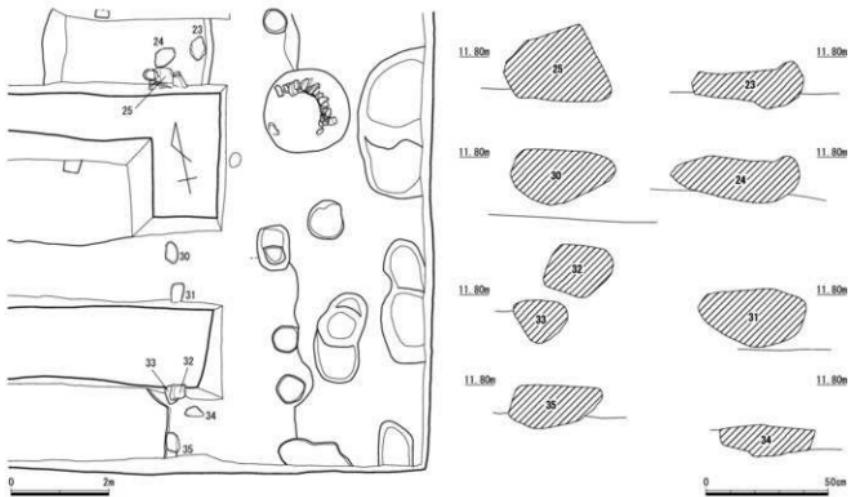


図6 4~6区壁石平・断面図 (S=1:100, S=1:20)

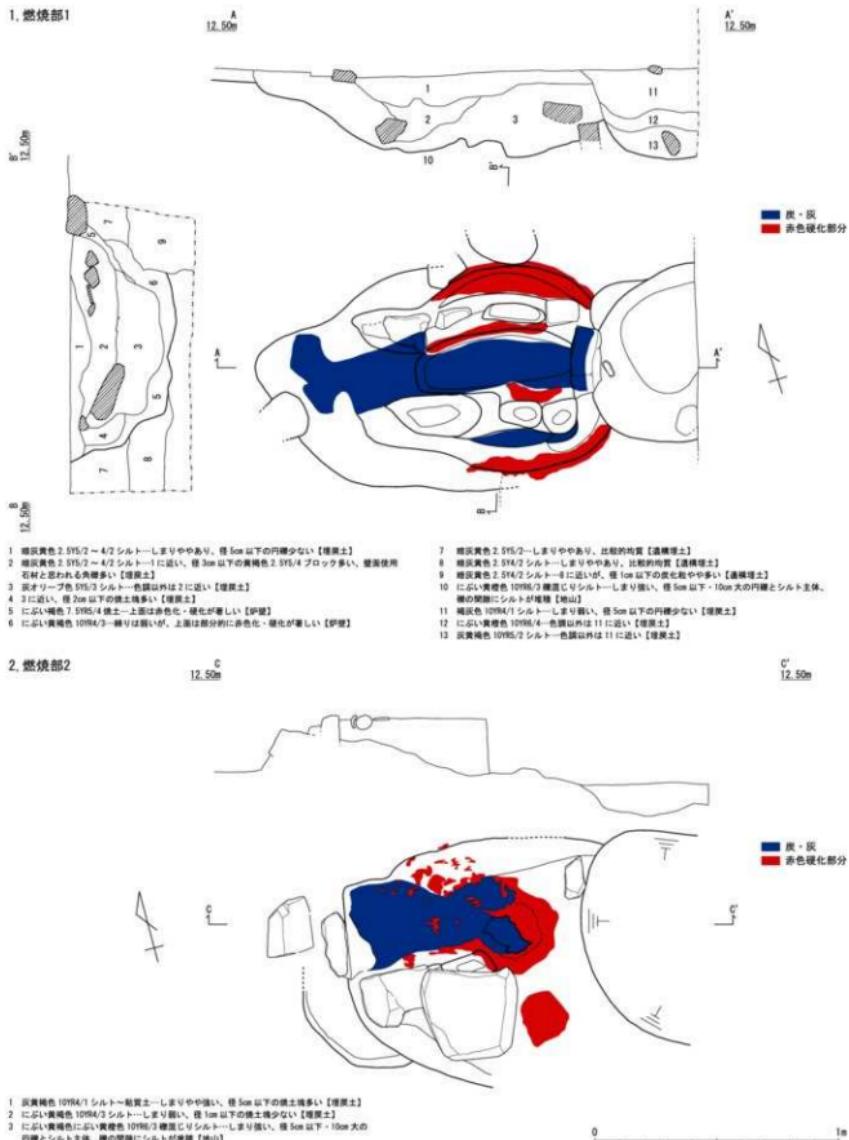


図7 燃燒部 平・断面図(1) (S=1:20)

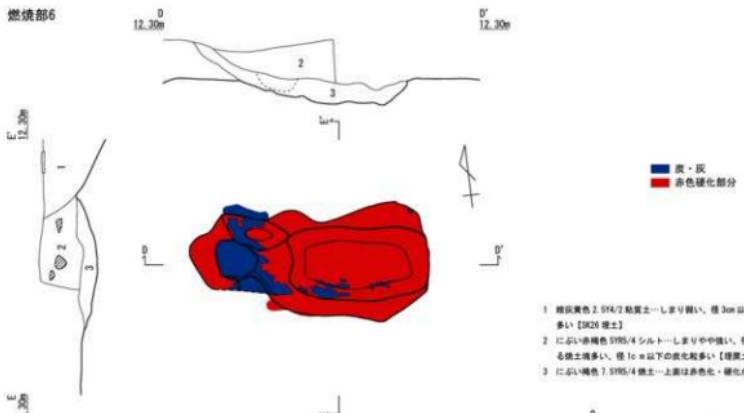


図8 燃焼部平・断面図(2) (S=1:20)

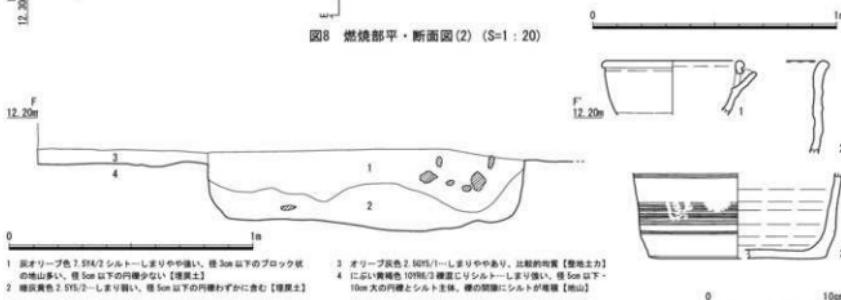


図9 SK11断面図(S=1:20)、出土遺物(S=1:4)

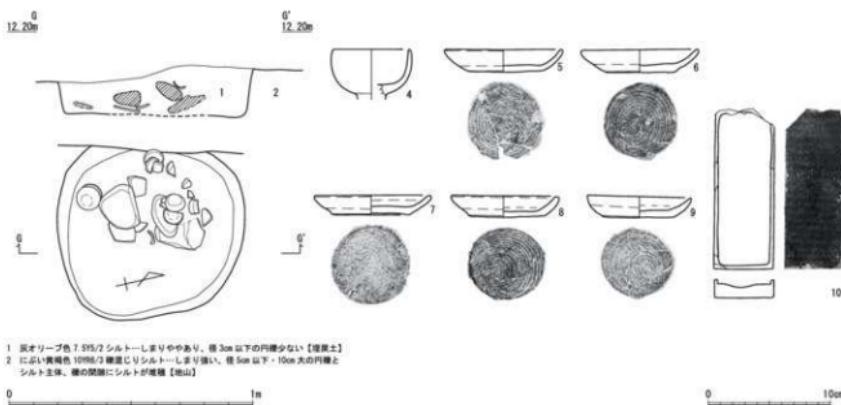


図10 SK15平・断面図(S=1:20)、出土遺物(S=1:4)

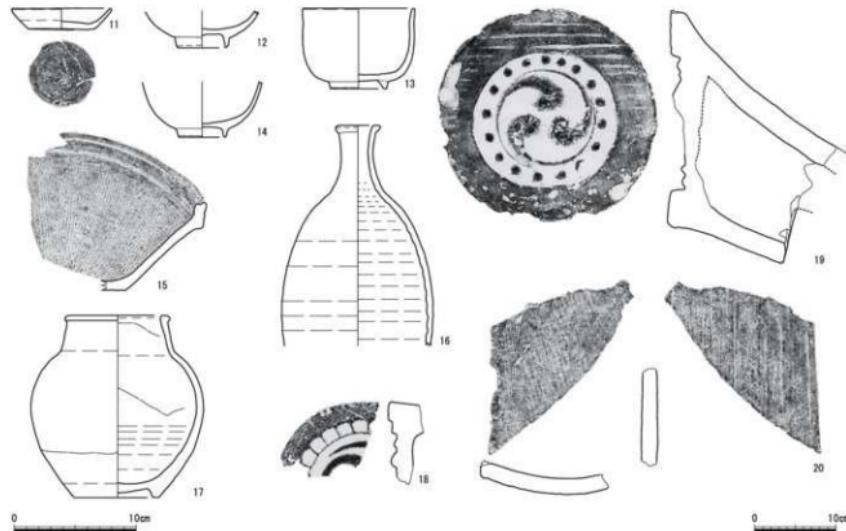


図11 SK36出土遺物 (20のみS=1 : 6、それ以外はS=1 : 4)

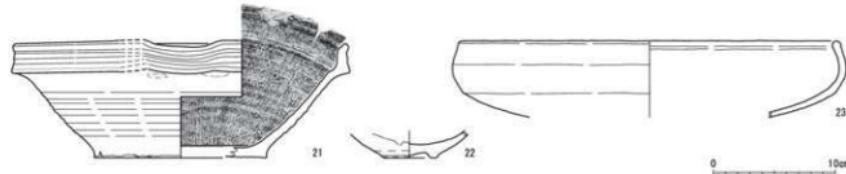


図12 SK37出土遺物 (S=1 : 4)

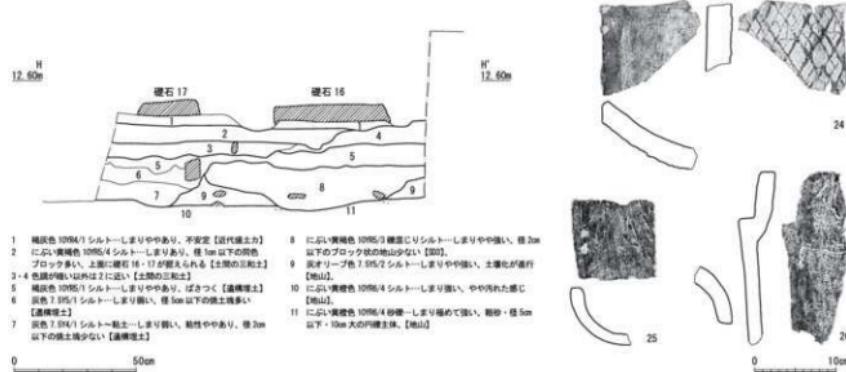


図13 SD3断面図 (S=1 : 20)、出土遺物 (S=1 : 6)

写真図版 1





1



17



5-10



21



13



24

## 報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと							
書名	姫路城城下町跡							
副書名	姫路城跡第376次発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第66集							
編著者名	福井 優							
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター							
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地1 TEL (079) 252-3950							
発行年月日	平成30年(2018年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひめじごんひめじし 兵庫県姫路市 わかなちきさばん・ひめじほん 網町81番・82番 ・83番・84番	28201	020169	34° 50' 06"	134° 41' 26"	2017. 5. 16 ~ 2017. 6. 17	247 m <sup>2</sup>	店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
姫路城城下町跡	集落跡	奈良時代 江戸時代	溝 礎石・竈・ 土坑・井戸	布目瓦 土師器・陶磁器・瓦・土製品				
要約	江戸時代の町屋跡を発掘調査し、礎石や土間の三和土、竈・井戸や土坑などを検出した。竈については2基の燃焼部が対となっていたことがわかった。また、奈良時代の溝を確認し、当地における江戸時代以前の様相を考える上で貴重な成果を得ることができた。							

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第66集 <b>姫路城城下町跡</b> -姫路城跡第376次発掘調査報告書-	
平成30年(2018年)3月31日発行	
編集	姫路市埋蔵文化財センター 〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元 414 番地 TEL (079) 252-3950
発行	姫路市教育委員会 〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地
印刷・製本	内海印刷株式会社 〒670-080 兵庫県姫路市白国五丁目8番4